

教育課程外における児童生徒の英語力向上に向けた取組 ～弟子屈町イングリッシュキャンプの取組を通して～ 弟子屈町教育研究所、弟子屈町教育委員会

I はじめに

本町では、町内の小学校高学年、中学生、高校生が、ALTとの触れ合いや英語を用いた体験的な活用等を通して、英語の音声や基本的な表現に親しむとともに、異なる文化への興味・関心を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることをねらいとして、平成29年度から町教育研究所と教育委員会が連携を図り、「弟子屈町イングリッシュキャンプ」を実施している。

また、実施に際しては、玉川大学との包括連携協定のもと、農学部実習から始まった連携を英語力向上における文学部との連携に拡充し、学部教員及び大学生を講師として活用するなど、外部機関と連携した取組を行っている。

II 実践の内容

小学生は1泊2日、中高生は2泊3日で実施し、2日目の午前中までは中高生のみが参加、2日目の午後からは小学生も中高生と一緒に活動に取り組んでいる。

2日目に実施する「イングリッシュトライアル」は昨年度までの実績を生かし、今年度からは町教育研究所英語部会が運営することとした。

○ イングリッシュトライアルの取組

児童生徒のアンケート結果から肯定的な評価が多かった「イングリッシュトライアル」の取組の具体について、実施の際のポイントを3点示す。

ポイント1 様々な立場の教員等の活用

→ 町内全ての中学校、近隣の小学校、高等学校の教員、町内のALTが面接員を担当している。様々な立場の教員等が面接員を担当することにより、町として中学生の英語力の実態を共有することができる。

また、中学校教員が参加生徒の実態等を踏まえ、実施する問題を選定するとともに、小学校の教員も面接員を担当することで、中学生の姿を通して小学校外国語活動において目指す児童像を具体的にイメージすることができる。

ポイント2 複数ブースの設置

→ 中学校教員が選定した8問を問題として、各ブース（条件に合う旅行プランについて説明する等）で挑戦できるようにしている。複数のブースを設定することにより、生徒一人一人の発話量を確保するとともに、生徒が一对一の状況に慣れ、安心して発話する環境をつくり出すことができる。

ポイント3 再トライの場の設定

→ 全ての問題への挑戦を終えた時点で中間交流を行い、再度自分が挑戦したいブースを決定する。中間交流を行うことにより生徒の意欲を高めるとともに、再度挑戦することで自己の課題がより明確になるなど、自己評価の能力を高め、成就感を味わうことができる。

- 【1日目(中高生のみ参加)】

 - ALTのふるさとクイズ
 - 参加者による自己紹介
 - イングリッシュキッチン

【2日目午前(中高生のみ参加)】

○ イングリッシュトライアル

【第2日目午後(小学生も参加)】

 - 英語を使ったゲーム
 - イングリッシュキッチン
 - 玉川大学の学生による体験的な活動

【3日目午前のみ(小学生も参加)】

 - 玉川大学の学生による体験的な活動
 - 振り返り

【イングリッシュキャンプの主な活動内容】



【即興的に英語で応答する様子】

終了後の生徒のアンケートには、以下の記述が見られ、生徒が英語でコミュニケーションを図る楽しさやその際に大切なことを学んでいた様子がうかがえる。

- ・イングリッシュトライアルで、今の自分の英語の力を知ることができてよかったです。今までは嫌々勉強していたけれど、「英語って楽しい」と思えました。
- ・外国人の先生を目の前にすると緊張して言葉が上手く出てこなかったけれど、身振り手振り、リアクションを使って自分の気持ちを伝えることが大切なのだと感じました。

英語を用いた体験的な活動を楽しむことができましたか

	ア	イ	ウ	エ
計	20	7	0	0
小学生	4	1	0	0
中学生	13	6	0	0
高校生	3	0	0	0

ア できた イ まあまあできた
ウ あまりできなかった エ できなかった

【児童生徒のアンケート結果】

III 実践の成果と課題

○ イングリッシュトライアルにおいて、生徒の発話量を保障し、繰り返し挑戦できるようにしたことにより、生徒が積極的にコミュニケーションを図り、達成感を味わうことができた。

● イングリッシュキャンプを通して見られた児童生徒の姿を学校の授業の中で引き出すために、成果の活用方策について検討し、町全体の授業改善につなげる必要がある。